

「エゾシカ管理のあり方検討部会」について

1 趣旨

道では、平成 29～33 年度までを計画期間とする「第 5 期北海道エゾシカ管理計画」を策定し、新たな個体数指数及び生息数の目標設定や、より効果的な捕獲手法と地域資源としての捕獲個体の有効活用をあわせて推進しているところであるが、その先を見据え、将来的な北海道にふさわしいエゾシカの管理と活用のあり方や、それに関わる利活用や担い手の育成などの課題を総合に検討していくことが必要である。

このため、「エゾシカ対策有識者会議」に「エゾシカ管理のあり方検討部会」を設置し、幅広い関係者から意見を伺い、エゾシカ管理の今後のあり方の検討を行う。

2 部会の体制

(1) 名称：「エゾシカ管理のあり方検討部会」

(2) 構成員：

伊吾田宏正（酪農学園大学農食環境学群環境共生学類狩猟管理学研究室 准教授）

上野真由美（（地独）北海道立総合研究機構環境科学研究センター主査）

岡本 匡代（釧路短期大学生生活科学科 教授）

沖 慶一郎（北海道銃砲火薬商組合 組合長）

庄子 康（北海道大学大学院農学研究院森林政策学研究室 准教授）

曾我部元親（エゾシカ食肉事業協同組合 代表理事）

(3) オブザーバー

- ・有識者
- ・有効活用関係者
- ・関係機関 など

3 検討事項

- 個体数管理の目標
- 有効活用の推進に向けた仕組み
- 捕獲体制の構築 ほか

4 スケジュール：

H31. 2. 13 第 1 回部会開催

R 1. 5. 22 第 2 回部会開催

R 1. 11 第 3 回部会開催予定

⇒以降、数回開催し R2 年度内に取りまとめ、R4 年度からの「第 6 期北海道エゾシカ管理計画」に反映

第 1 回エゾシカ管理のあり方検討部会 (H31. 2. 13) 概要

【今後のエゾシカ管理目標について】

- 過去の管理目標設定の振り返りを行い、東部地域の目標は、被害を軽減し個体数が大発生水準を再び上回る、あるいは許容下限水準を下回るリスクを減らす個体数水準から目標を設定していたことを確認
- 今後は、被害対策に加えて、資源利用の観点も加えた新たな目標の設定を考えるべきだという方針で合意が得られた

【今後のエゾシカ管理のあり方について】

- きめ細かい地域主体管理の推進が必要である（エゾシカ管理 GD では猟区管理・ゾーニングを提唱）
- 被害者（農家等）と受益者（狩猟者・食肉事業者等）の乖離が課題（被害者にも利益が分配される仕組みも必要？）
- 利活用における事業者の経営の安定化が課題（資源管理の視点が重要。認証業者の差別化）
- 利活用業者の規模や水準のばらつきが課題
- 利活用の更なる推進のためには、事業者と捕獲者の行動を分析するべきではないか。
- 利活用と被害対策のバランスを考慮した目標（必要最低資源量）の再検討をすべき（重要かつ難しい）
- 利活用の地域経済波及効果をしっかり評価していくべき
- 専門化の現況を踏まえつつ、ハンターの狩猟機会の不公平感の是非を議論すべきではないか。
- シカと人間の共存に関する哲学の醸成も必要（人とシカの関係）

【今後の部会の検討事項について】

以下の課題が提起され、第 5 回目までに検討していくこととした（1～5 に関しては第 2 回目の議題となった）。

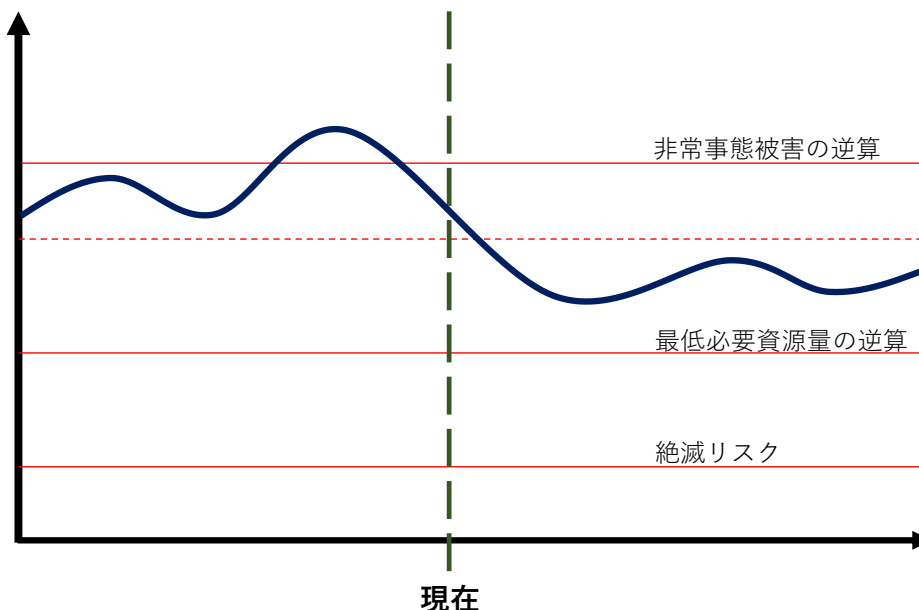
1. ハンターが食肉処理場にシカを持ちこむ要件
2. 一次処理の問題（GD では一次処理システムの導入による効率的な広域収穫を提案）
3. 食肉事業者の安定経営に向けた課題
4. 食肉衛生の確保（GD ではトレインドパーソン制度の導入を提案）
5. 捕獲に関する個体の性別による利用の違い
6. 囲いワナなど技術的な課題の再検討
7. 新規事業者の推移
8. 管理目標の設定（生息状況評価部会との連携・役割分担）

議題2：現行計画・目標の振り返りについて **あり方検討部会第1回目**

これまで→ 絶滅リスクに主眼をおいた目標設定
(かなり低密度)

これから→ 利活用にも配慮した目標設定

個体数にすべての観点を集約したとしたら・・・



議題3：今後のエゾシカ管理のあり方について

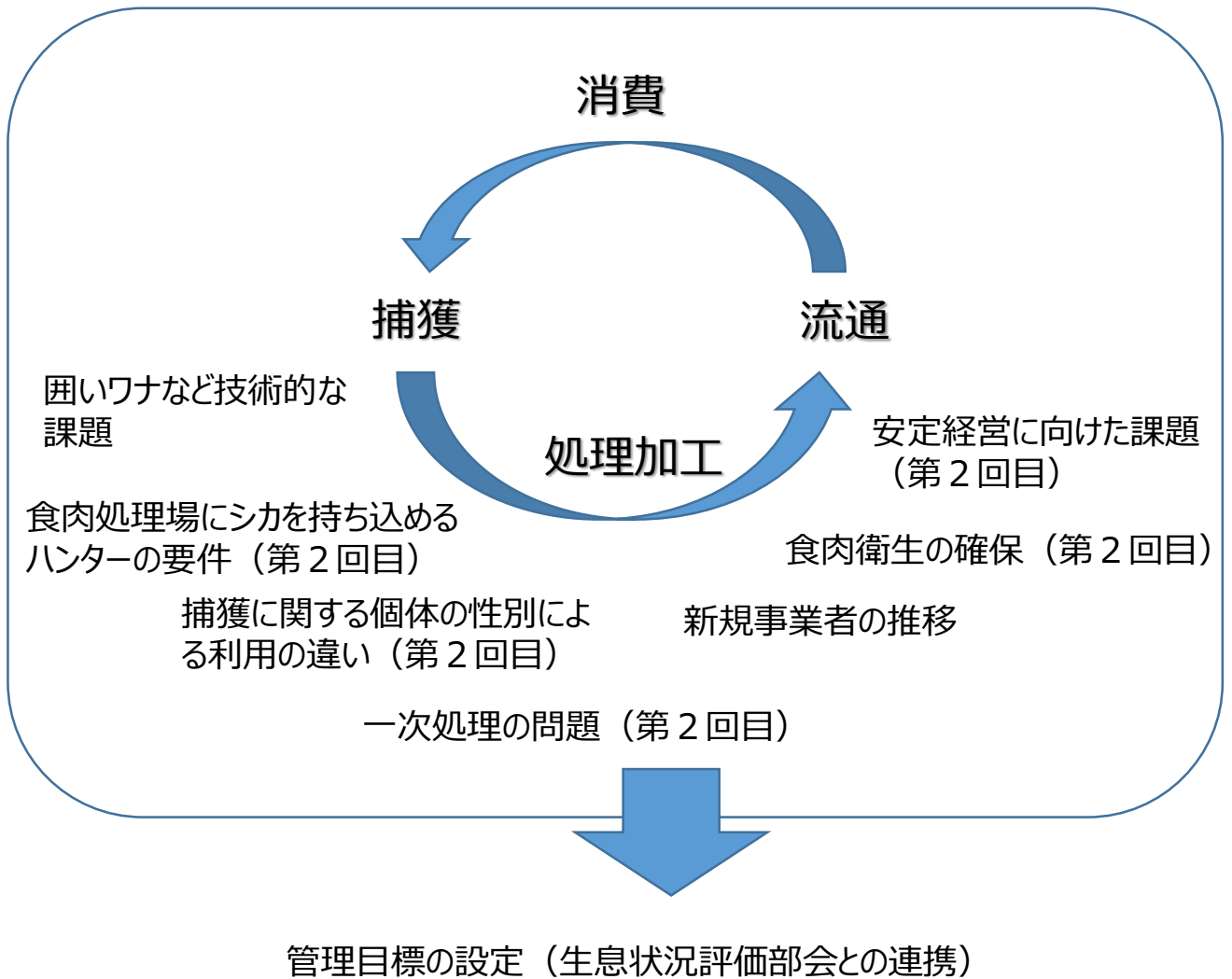
管理学課題

- 利活用の目標の検討
- 地域管理の必要性
- シカと人間の共存に関する哲学
- 被害者と受益者の乖離
- 利活用をめぐる事業者と捕獲者の行動の変化

産業的課題

- 利活用の地域経済波及効果
- 利活用における事業者の経営の安定化
- 利活用業者の規模や水準のばらつき
- 専門化の是非

議題4：今後の部会の検討事項について



第2回エゾシカ管理のあり方検討部会（R1.5.22）概要

【有効活用の現状】（事務局）

施設数はH22年度から80～100の間で概ね増加傾向。

- エゾシカ肉処理施設数、処理頭数、管内の処理頭数／捕獲頭数は、東部の方が高い（高い）。
- 西部は、活用が進んでいる振興局と、活用されていない振興局が二極化。
- 大規模な処理施設（処理頭数500頭以上）が74%の頭数を処理。
- 搬入頭数の割合は、100頭以上の13名（4%）による搬入が約3割を占め、50頭以上の33名（10%）による搬入が約半数を占める。（H30ジビエ利用拡大推進事業実績）

【食肉衛生】（事務局、食品衛生課）

- エゾシカ衛生処理マニュアル、エゾシカ肉処理施設認証制度
- 食品衛生法（営業許可、施設基準）、HACCPによる衛生管理

【狩猟者の施設への搬入確保について】

（エゾシカジビエ利用拡大推進事業参加者アンケート結果：事務局）

- 車両は、荷台のあるピックアップトラックや軽トラック、リアキャリアなどを牽引できる大型のSUVタイプの車両を使用。
- エゾシカの捕獲は、メスを一番に優先。オスは若い個体を優先。
理由としては、食肉処理施設の買取価格が高い、食肉としての品質が高い、施設の買取条件となっている など。
- 狩猟者からの課題としては、施設の場所が遠く速やかな搬入ができない、搬入に係る労力に対して対価が低い、施設の受入体制の不足 など。

【施設の現状について】

（有阿寒グリーンファーム）

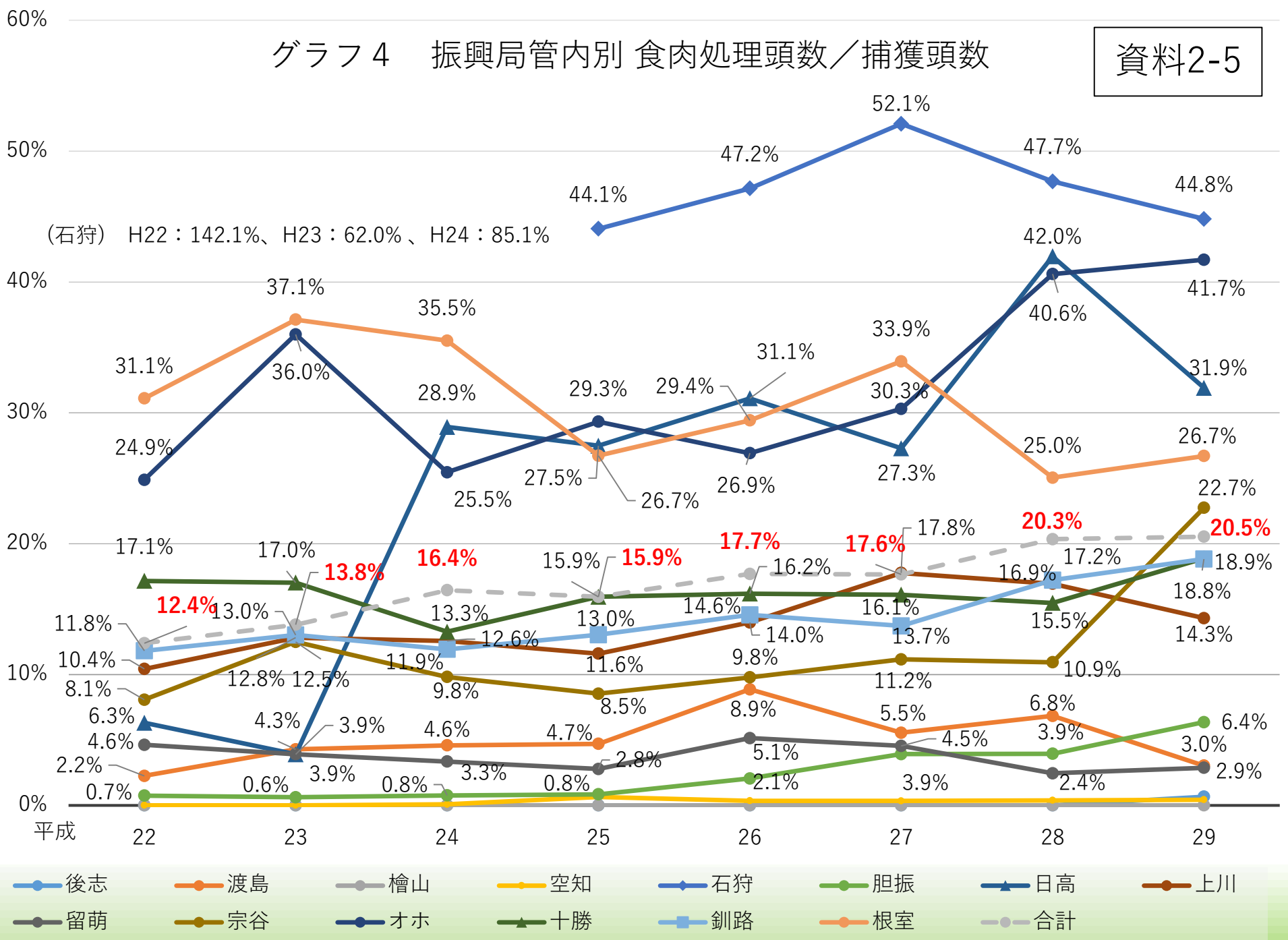
- 施設建設に係る費用～建設費、減容化施設、養鹿施設
- 施設運用に係る費用・収支～年間収支
- 利益を上げる方法～人件費の減、高価格化、処理頭数を増加
- 一時処理車の導入～関係者（捕獲者・回収者・施設・市町村）それぞれにメリットが必要

（株アイマトン（黒島取締役））

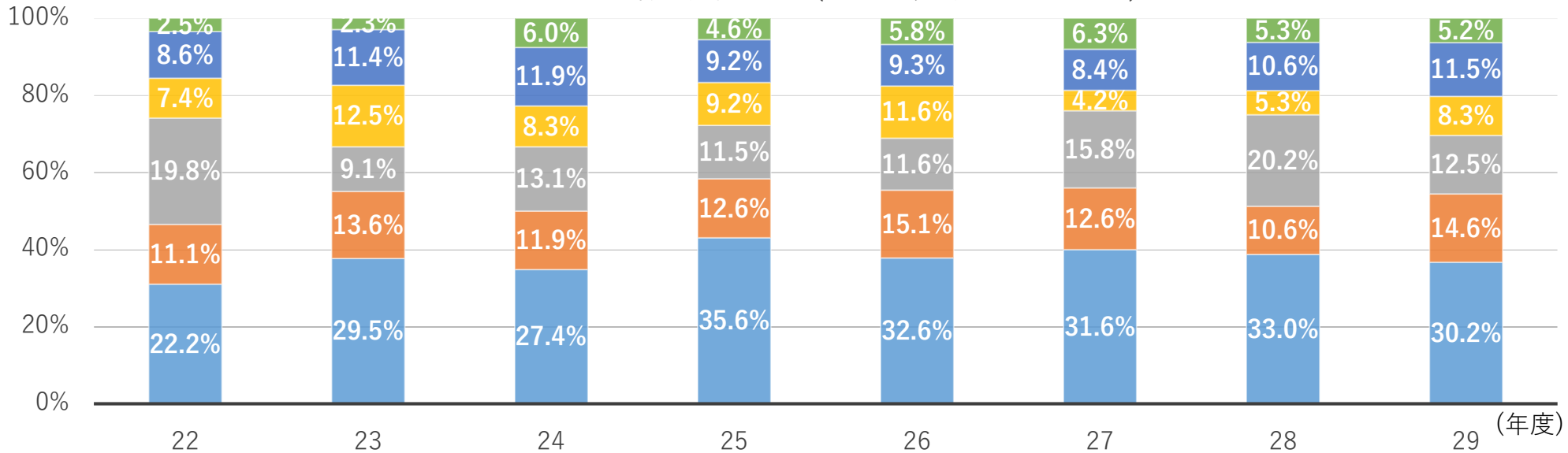
- 仕入れの課題 ～納入時の形態、個体の不安定、時期の偏り
- 商品製造の課題 ～個体識別の管理、着弾箇所、仕入れ頭数の偏り
- 販売、在庫の課題～求める部位の偏り、時期の偏り、品質の偏り

グラフ4 振興局管内別 食肉処理頭数／捕獲頭数

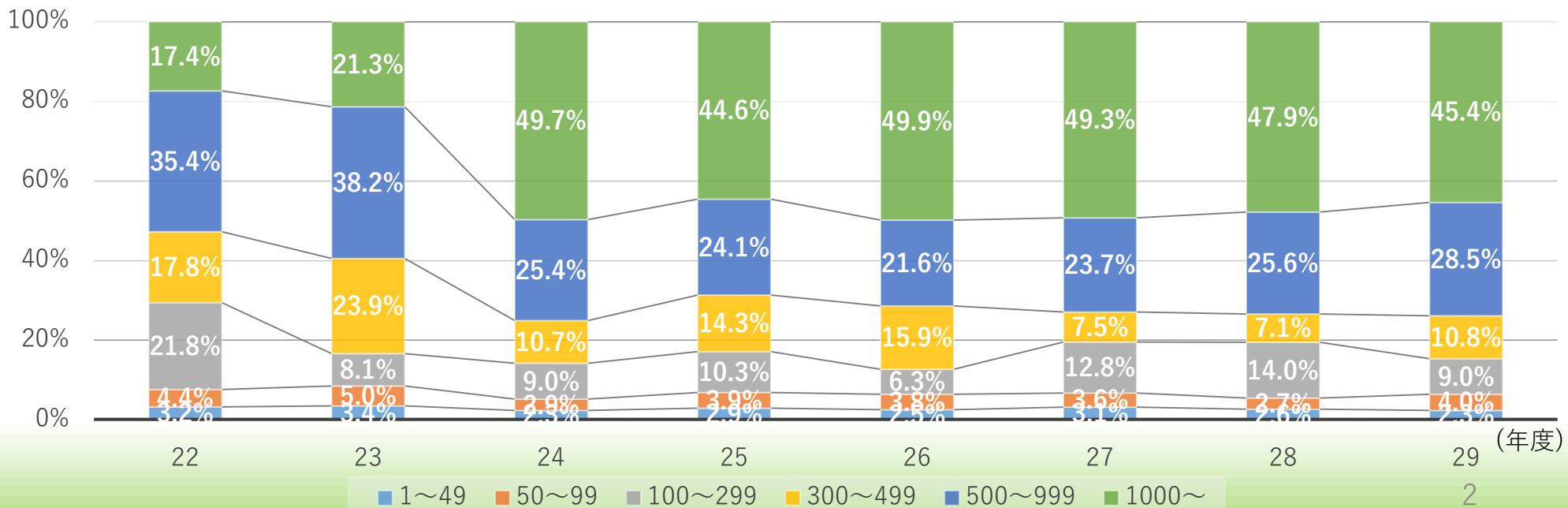
資料2-5



グラフ5 施設数割合（処理頭数クラス別）



グラフ6 処理頭数割合（処理頭数クラス別）



エゾシカ管理のあり方検討部会スケジュール(案)

	時期	テーマ	内容	オブザーバー
第1回	平成31年2月	個体数管理の目標	<ul style="list-style-type: none"> ○現行計画・目標の振り返り ○今後のエゾシカ管理のあり方 ○今後の部会の検討事項 	松田裕之(横浜国立大学) 近藤誠司(北海道大学)
第2回	令和元年5月	有効活用の推進に向けた仕組み	<ul style="list-style-type: none"> ○有効活用の現状 ○食肉衛生の確保 ○食肉の安定供給 <ul style="list-style-type: none"> ・施設の現状 ・狩猟者の施設への搬入確保 	<ul style="list-style-type: none"> ・食肉処理業者(株アイマトン) ・食品衛生課 ・エゾシカ協会
第3回	令和元年11月	有効活用の推進に向けた仕組み	<ul style="list-style-type: none"> ○販売者(小売店)の現状 ○エゾシカの経済的評価・価値 ○今後の資源管理に向けた課題のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ・販売者(コープさっぽろ) ・エゾシカ協会
第4回	令和2年2月	捕獲体制の構築	<ul style="list-style-type: none"> ○人材育成 ○地域主体の資源管理 ○技術的課題の解決に向けて <ul style="list-style-type: none"> ・困いワナの捕獲技術確立 ・专业化(ジビエ利用の捕獲) 	<ul style="list-style-type: none"> ・エゾシカ協会
第5回	令和2年5月	部会検討のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○次期エゾシカ管理計画への反映 ○検討を継続する事項 	